

実践報告

2020年度博物館学芸員養成課程講義にかかる動向 1

—博物館教育論を題材として—

Trends in museum curator training course lectures 1

on the subject of museum education

橋本唯子

HASHIMOTO Yuiko

和歌山大学教養協働教育部門 准教授

Abstract

Of the museum curator training course offered by the author in the first semester of 2020, "Museum Education" was conducted as a distance lesson centered on on-demand lessons and group work. Among the lesson contents, we will show an example of the presentation of assignments, and show the results and assignments based on the results of questionnaires from students.

Keywords: 博物館学芸員資格取得科目 博物館教育論 遠隔授業 課題提示 博物館における学びの意義

1. はじめに

2020年度は、世界中において新型コロナウイルス感染症における対応が迫られるなかで、教育機関もその影響を大きく受けた。本学では特に前期において原則として遠隔授業が用いられ¹、学生・教職員の多くが対応に苦慮した。

本稿では、筆者が和歌山大学博物館学芸員資格取得に関する運営委員会委員長を務め、当該資格取得に必要な講義を多く担当していることがあり、特に博物館学芸員資格取得における遠隔授業のメリットとデメリットについて検討する。なお、今年度前期に博物館教育論を担当したため、当該科目を主な検討材料とし、それ以外の科目については、別稿に譲ることとする。

2-1. 博物館学芸員資格について

既に周知のことではあるが、学芸員資格とは博物館法によって定められた資格であり、本学では全19単位を取得し、学士の学位を有することによって得ることができる。本学では連携展開科目のうち資格科目（ミュージアム科目）と位置づけられ²、全学部学生が資格取得可能となっている。

既述のように今年度前期は原則遠隔授業という方針が決まり、最も進行が困難であったのは通年科目として開講している「博物館実習Ⅱ」（館園実習）である³。当該科目については現時点では講義が終了していないため、改めて検討することにした。

ミュージアム科目のうち、前期開講を予定していたのは、筆者担当「博物館教育論」と、別の教員が主担当である「博物館資料保存論」、同じく「生涯学習概論」（教育学部開講科目を全学部生に開放）であった。このうち、「博物館資料保存論」については、一部実地授業が必要であったため、和歌山大学博物館学芸員資格取得に関する運営委員会を開催し⁴、審議した結果、後期開講とした。

2-2. 講義形式

このような経緯を経て、博物館教育論を今年度前期に開講した。遠隔授業にはさまざまな手法があるが、どのような講義を行うべきか。本学遠隔授業実施ワーキング・グループが提示した「和歌山大学遠隔授業実施ガイドライン」によると、「感染拡大防止の観点から、全ての教員が導入可能な平易な方法を推奨するとともに、受講学生の受信環境に配慮した配信方法を推奨する」ことが基本方針として掲げられ、より具体的には、本学学習支援システム（Moodle）を活用し、音声付きパワーポイントを公開することが推奨モデルとして提示された。そのため、当該科目では順次音声付きパワーポイントをオンデマンド型で公開し、授業後半において Teams を活用したグループワークを実施した。

この点においては、「4. 受講学生からの反応」において示しているように、「授業のスライドがたまに勝手に次に進んでしまうようなことがあった」という声があり（複数）、以後後期授業においては、音声付きパワーポイントと、音声動画形式とを選択できるように両方アップすることで改善策とした。

2-3. 博物館教育論とは

まず博物館教育論とは、改正博物館法の公布・施行（2008）に基づき、翌年『学芸員養成の充実方策について』と題した報告書が作成されたことを契機として、2012年4月から全面的に実施された新しい学芸員養成カリキュラムのうちのひとつである。同上報告書に付された「（別紙2） 大学における学芸員養成科目の改善（ねらい・内容）」によると、当該科目のねらいは「博物館における教育活動の基盤となる理論

や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能に関する基礎的能力を養う」ものである。またその内容は、「学びの意義」「博物館教育の意義と理念」「博物館の利用と学び」「博物館教育の実際」などとなっており、科目の重要性については「これからの博物館がどのようにあるべきかを考えた場合、「博物館教育論」を避けては通れない」といった指摘もなされている⁵。

2-4. 博物館教育論を遠隔授業で行う際に検討すべきこととは

既述のように本学では音声付きパワーポイントによる授業の公開が推奨されたため、この形式に基づいて、なおかつ博物館教育論を教えるために上記ねらい・内容に準拠しながらどのように授業内容を伝えるべきかを検討した。

「(別紙 2) 大学における学芸員養成科目の改善(ねらい・内容)」では、「学びの意義」が内容として記されている。しかしそもそも受講学生の多くは、博物館が社会教育施設であるということに対して認識を持っていない。学生たちにとって学びの場とは限りなく「学校」にあり、それ以外の場所やそれ以外の学び方について意識はほとんどないのが現実である。

当該科目において重要な「学びの意義」とは、すなわち「博物館で学ぶことの意義」であり、それは具体的にどのようなものであるか、提示する課題のなかで受講学生たちが自ら学ぶことによってその意義を見出すことを目的とした。そのため、当該科目において、授業内容はもちろんのこと、提出させる課題の内容に重きを置くこととした。

3-1. 課題内容

遠隔授業が実施されて以降、学生から課題の多さについての意見が散見される状況が度々報道された⁶。手探りで授業を進めるなか、これまでほとんど用いたことのない形式による課題提示を検討するうえで、さらにこれらの意見を勘案することは極めて困難である。しかし、遠隔授業における課題に対する学生の意見を熟読すると、単純な課題の量の多さという点だけではなく、「フィードバックの少なさ」・「図書館閉館に対応されない課題提示」・「課題内容への不満」に集約されるように見受けられた。そこで特にこれら3点の改善に焦点を当てた課題提示を検討した。

3-2. 提示課題対策 1 フィードバック対応

この点については、当該講義のみならず担当科目全般において、また対面授業時から常に検討を続けており、毎回提出させるリアクションペーパーを毎週確認し、一部を画面上で紹介して相互に受講学生が把握できる方法を継続した。授業内容への質問や学生間の意見交換などが行われ、「自分とは違う意見があることがわかり、参考になった」といった声を受けている。この点は遠隔授業となって以降手書きからデー

タ提出としたことで対応しやすくなった利点を得た。

3-3. 提示課題対策2 図書館利用を前提としない課題

本学図書館は、新型コロナウイルス感染が徐々に拡大するなかで、窓口対応者のマスク着用やセミナールーム・自習室の使用不可など、状況に呼応した対応を模索してきた。

2020年4月7日の緊急事態宣言発出にともない、臨時休館を実施した(6月24日まで)。そのなかで事前申込による資料利用や学生向け郵送貸出サービス、在宅でも利用可能な教育・研究用電子資料についての案内などに加え、開館以降は来館が困難な学生向け郵送貸出サービスを実施するなど、さまざまな対策を行ってきた。10月12日からはラーニング・アドバイザーの対面相談対応を再開するなど、利用条件も徐々に制限を緩和しているが、依然昨年度と同様ではないのが現実である。また、上記サービスの提供など図書館の対応について都度周知されていたとは言い難かったため、「図書館はずっと使えない」と認識している学生も多かった⁷。これらを鑑みると、そもそも図書館利用を前提としない課題の提示が必要であった。むしろこれを機会として、IRDBやGoogle Scholarなどを活用する方法を理解し、それらによって課題を検討することを前提とした。

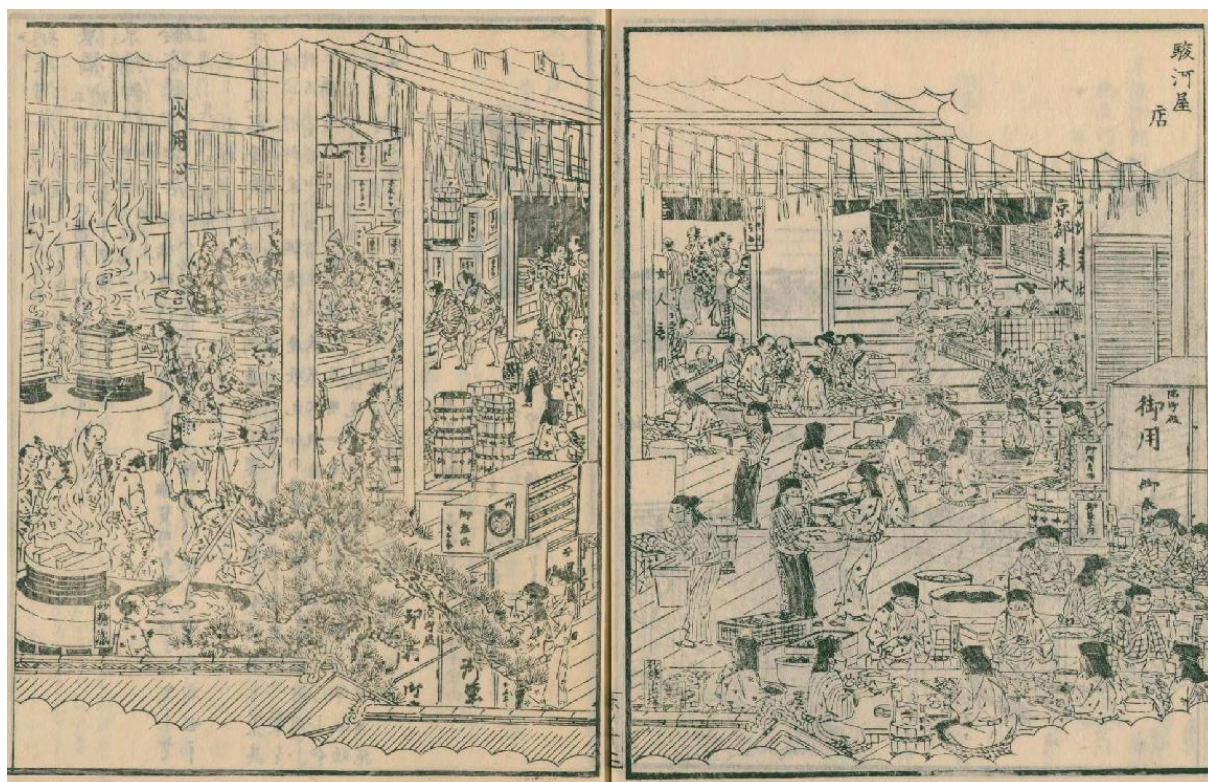
3-4. 提示課題対策3 課題内容の検討

既述のように、図書館による資料調査を前提としない課題とすると、今日ではインターネット上の情報入手が作業のほとんどを占めることとなる。受講学生の多くが同じように情報を検索することは容易に理解できる。

しかし、学芸員に求められる能力や知識は、来館者が表層的に「ググる」ことで把握できる内容にはとどまらない。むしろそれを超越した説明が加えられることによって展示の奥深さを認識できるのである。そのため、課題では資料を提示し、そこに含まれた情報をくみ取って、その資料の面白さを如何に伝えることができるか、を問う点を意識した。また次の回において、筆者からの回答例を示し、次回以降の参考とすることを求めた。

具体的に提示した課題の一例は以下のものである。

問：この絵が何であるか(わかれば)、と、この絵の「どこが、どう面白いか」を読者に伝わるように400字以内で説明してください。人(もしくはInternet)に尋ねずに自力で答えを探してください。(中略) 作品理解の正確さよりも「見た人が絵に関心を寄せ、更に知りたいと思わせる文章」に重点を置いてください。文末に出典を記してください(出典は字数に含まれません)。



『紀伊国名所図会』後編一之巻 駿河屋（国立国会図書館デジタルコレクションより）

筆者が評価するポイントは、「駿河屋」「菓子所」などの表記から現在も和歌山市内に残る老舗菓子舗 総本家駿河屋を描いたものであること、「西浜御殿」「御所殿御用」などから紀州徳川家御用菓子司であること、頭巾やマスクのような被りものによる衛生管理、注連縄^{しめなわ}と結界・「女人無用」との関係性などを指し示すことである。注連縄が結界の意を示すことは、たとえば GoogleScholar を用いると、山際（2018）など多くの文献から理解し得るが⁸、残念ながらその点に言及した受講学生はほとんどいなかった⁹。

また、この絵が何であるかをどのように探したかという点については、右上の「駿河屋」から、「江戸時代 駿河屋」などのキーワードを検索して総本家駿河屋のホームページにたどり着き、そのホームページ上に同じ絵が掲載されていることから把握したといった記述があった。

上記ポイントについては、一部指摘する受講学生もいたが、「資料から得ることができる情報を見つけ出し解説を加える」ということ自体が難しく、総本家駿河屋のホームページから羊羹についての説明を行うなど、課題の意図を十分に理解できない受講学生も少なくなかった。

なお、描かれた人数の多さを指摘するものや、庶民に向けた菓子と御用菓子との相違、「火用心」に言及するものなど、筆者の意図を超えた指摘もあり、その点は興味

深い結果となった。

3-5. その他 Teams によるグループワーク

博物館教育論におけるグループワークについては、遠隔授業開始時から暗中模索の末、Teams を活用したグループワークと、オンデマンド型による各班報告および受講学生による各班の評価、また最終回にはそれらを基にしたフィードバックと総括を各班が行って終了することとした。また通信環境の相違・プライバシー保護の観点から「マイク推奨・カメラ任意」としたところ、全受講学生がカメラなしでの参加となった。この点については、次章において賛否あったことを指摘しておきたい。

3-6. 小括

このように、遠隔授業を用いた博物館教育論においては、「博物館で学ぶことの意義」を、受講学生は自ら提示された課題を解くことによって、より深く理解することを大きな目的とした。

そのことは、次章で示すアンケートにある、「他の授業の課題とは異なった課題で、取り組むのが面白く、それだけでなく学んだり考えたりすることができた」(7) や、「答えがない問いだったため、難しくはあったが、次の週に皆の答えを聞くことは楽しかった」(8) などの意見によって、ある程度達したものと考えられる。

4. 受講学生からの反応

受講学生からの反応は毎回のリアクションペーパーと、最終回におけるアンケート調査において断片的ではあるが知ることができた。そのうちの一部を記す。たとえば「意外とオンライン授業の方が一人でじっくり考えたりできたので、普段の授業より自分の身になったように感じました」(19) に見られるように、授業への関心が強まった傾向は明確に感じられた。これは遠隔授業による利点であったといえよう。

No.	質問事項	回答
1	この授業を履修して満足していますか？不満があった場合はどこが不満だったか教えてください	聞き直しができるのが良かった。聞き直せることで、前の話と繋げることができる。 グループワークも過度な緊張もなくスムーズに話に入れた。 教員とのやりとりがしづらいが問題かなと思う。特に初対面の教授とは連絡が取りづらい。
2		今期のオンライン授業の中では授業のテンポもよく比較的受けやすいという印象をもった。
3	この授業の形態（遠隔・オンデマンド型、グループワークのみ同時双方向型）、教員とのやりとりは十分でしたか？	質問した際にすぐに返信が来ないという点については仕方ないかもしれないがそれはちょっと課題をやるうえでは辛かった。
4		リアクションペーパーに書いたことを次の授業で反映していただき、グループワークに積極的に取り組めたので、十分だったと思います。
5		オンデマンド型ばかりだと疲れるので、少しグループワークがあっても良かったです。
6		WEB上での提出であるため、質問や課題が本当に届いているのか、提出できているのかは不安ではある。
7	各回の課題について、満足していますか？不満があった場合はどこが不満だったか教えてください	他の授業の課題とは異なった課題で、取り組むのが面白く、それだけでなく学んだり考えたりすることができたので満足しています。
8		答えがない問いだったため、難しくはあったが、次の週に皆の答えを聞くことは楽しかった。
9	グループワークについて、満足していますか？不満があった場合はどこが不満だったか教えてください、また「マイク推奨カメラ任意」としましたが、それはどうでしたか？	「マイク推奨カメラ任意」とすることで、緊張感や圧がなく、自然体でのグループワークを行うことができた。結果、満足のいく内容となった。
10		満足。目を見て話すのが私は苦手だったので声だけで話し合うのは学生にとっては嬉しいことかもしれない。
11		もう少し仲良くなる時間が欲しいと思いました。カメラは任意だったので誰の顔も見ませんでした。グループワークは対面でやるべきだと思います。
12		時間が短い気がする、もっと深い議論がしたい。
13	授業内容は理解できましたか？理解が困難であったところがあるとすると、どこでしたか？	これまでのミュージアム科目と同じくらいの理解はできた。
14	授業を複数回視聴することはありましたか？あったとすると、なぜ複数回視聴しましたか？	理解をもう一度深める。授業を進める内に前に言っていたことと関連付けができる。
15	以後このような授業が実施される場合、どのようなことを望みます	課題する時間を含めて105分の間に収めてほしい。
16		授業を受ける側がやる意思を持っていれば、どのような形でもできると思う。
17	授業を受けて考えたこと、その他自由記述欄	資料と音声による講義で、とても分かりやすかった。また丁度良い課題の量で、他の講義の負担がおおきすぎる分、とても楽しく取り組むことができた。半年間、ありがとうございました。
18		いきなり全てオンライン授業の自粛生活になりましたが、対面で人と話すこと、ネット環境があることのありがたさがわかりました。気兼ねなく県外の博物館、動物園にいけるようになってほしいと思います。
19		意外とオンライン授業の方が一人でじっくり考えたりできたので、普段の授業より自分の身になったように感じました。
20		授業のスライドがたまに勝手に次に進んでしまうようなことがあったため、同時双方向型の授業の方が受けやすいと感じた。
21		コロナの影響で予想よりも多くの博物館が変化、危機に陥っていることを知り、大変驚きました。ただ、各博物館がこの状況をどう乗り切るのかに興味を持っている自分もいます。人々が博物館に向ける「おもしろー」を博物館側は今後どう解消していくのか、注目したいと思います。半年間ありがとうございました。
22		学芸員の資格取得を目指しているのですが、何が面白いのか、どう伝えるのか考えることがあまりできていないなと思いました。伝えたいことをただ単に言うだけではだれでもできるので…。おもしろーが伝わるためには、自分もおもしろーと思うことが何より大事なのではないのかなと思いました。
23		時間のかかるものもありましたが、自分で創造して、でも自分の考えを表すことができるように回答する、今まであまり触れたことがない形式のテストだったので新鮮で面白かったです。

受講学生によるアンケートから抜粋（2020年7月実施）

5. 改善点および課題

ただし、課題も顕在化されてきている。「質問した際にすぐに返信が来ないという点については仕方ないかもしれないがそれはちょっと課題をやるうえでは辛かった。」(3)について、もちろん可能な限り早く返答を行うことを心がけていた。しかし受講学生の一定程度が深夜に履修・課題に取り組むオンデマンド型授業において¹⁰、昼夜・休日問わず絶えず送られる質問に即答できない状況もあった。また提出期限間近に示される質問も多い。この点については、常に課題提出に追われている遠隔授業における課題提示のあり方全般にかかわる問題点でもあり、今後の検討課題としたい。

また特にグループワークにおける受講学生のコミュニケーションツールにかかわる賛否について、「もう少し仲良くなる時間が欲しいと思いました。カメラは任意だったので誰の顔も見ませんでした。グループワークは対面でやるべきだと思います。」

(11)という意見もあり、そもそも「仲良くなる」ことを目的としてグループワークを行っているわけではない点を擱くとして、またカメラを強制することが正解ではないことも指摘するとして、一定程度「顔が見える」ことを希望する受講学生がいることも考慮する必要がある。「任意」としたのはそのことを考えたため、筆者は常にカメラを使用していたが、以後受講学生がカメラを使用しやすくする方法を模索したい。

さらに提示した課題に対してどれほど調査・検討した解答が示されたか、今年度の受講学生の解答は必ずしも十分ではなかったことも把握しなければならない。課題提示は有効であるという結果をもとに、対面授業においても、受講学生がさらに課題内容への理解を深めて解答できるよう、提示方法の検討を進める。

6. まとめ—受講学生が当該講義を学ぶ意義—

博物館教育論の原点は、博物館における「学びの意義」への理解、すなわち「博物館資料のプロフェッショナルである学芸員が、その博物館のコレクションがいかに面白いのかを必死で語ること」である¹¹。遠隔授業であるか否かにかかわらず、当該科目において、その点の理解を深めてもらうことを目的のひとつとしている。なお遠隔授業という手法において、課題提示の内容によっては、それらを従来以上に進めることができる点について新たな知見を得た。

このように、遠隔授業という新たな取り組みにおいて、メリットとデメリットを概観してきたが、ことに博物館学芸員資格を取得するにあたって、対面を必要とする実習が不可欠であることも指摘しておきたい。この点については別稿において詳細に

検討したい。

博物館に来館者を呼び込むことができないというのは、博物館において初めて体験する難事とあってよい。そのなかで示された、新たな多くの取り組みについて講義を通して紹介しつつ¹²、それらが改めて「博物館に行きたい」「博物館は必要である」といった思いを得てもらうためのものであることを伝えた。

そしてそれらは筆者が遠隔授業を実施しながら受講学生に感じてもらいたい点と、通底するものでもあった。学生ひとりひとりが、この難題と向き合うことで、大学という空間のなかでひととの交流を通じて学ぶことの重要性、また大学で学ぶことの意義そのものに思索を深めてくれることを祈念せずにはいられない。

また今回の経験を通して遠隔授業の方法論という点にとどまらず、最終的には「何を教えるか」ではなく、「何を教えるか」に教員自身が立ち戻ることの重みを不十分ながら理解することができた。以後更に改善を加えていきたい。

¹ 「【重要】緊急事態宣言発出に伴う授業開始等の再変更について（3月31日より更新）」（2020年4月7日）〔<http://www.wakayama-u.ac.jp/news/2020040800055/>〕（最終検索日：2020年12月29日）

² 連携展開科目とは、「学習者が知的関心に基づき、教養教育科目で得た知識やスキルをさらに進化、発展させるための授業科目、あるいは専門教育科目と連携させることで学習者のもつ知識やスキルの適応範囲を拡大させるための授業科目」である（『Course Guide2020 履修手引き』より）。

³ 『博物館実習ガイドライン』（文部科学省、2009）によると、博物館実習（館園実習）とは、「・博物館資料の収集、保管、展示、整理。調査研究、教育普及等の学芸員の業務と博物館運営の実態を、実務を体験することによって理解する。・博物館園での実務体験によって、大学で学んできた博物館像を確認する」という2項目が主たる目的とされている。しかし今年度は、「令和2年度における学芸員養成課程に係る博物館実習の実施に当たっての留意事項」について（通知）（文化庁企画調整課、2020年4月13日付け）により、実施時期、期間、内容等の調整を博物館と大学間で行い、実施時期を収束後とすること・学内実習への振り替えの検討など、「受け入れ先の博物館と相談しつつ弾力的に検討」することが求められた。

⁴ 2020年4月2日開催（メール審議）。

⁵ 柿崎博孝、宇野慶『博物館教育論』（玉川大学出版部、2016）

⁶ 「緊急！大学生・院生向けアンケート」大学生結果速報、全国大学生生活協同組合連合会（2020）によると、「全ての授業で課題が出るため量があまりにも多すぎて生活習慣が乱れ体調が崩れるほど」などとある。

⁷ たとえば、「卒論執筆に必要な図書館が使えない」（「学費半額 学生ら懇願」『朝日新聞』2020年9月16日付け記事）といった内容である。ただし記事掲載時点では本学図書館は9時から17時の間開館しており、資料利用も可能となっていた。学生向け郵送貸出サービスも行っており、周知を徹底することで理解を得ることはできた可能性が高い。

⁸ 山際彰「時間的意味から空間的意味への意味変化の可能性：「端境」の変遷を通して」（『国立国語研究所論集』16所収）、金菱清「伝承世界を生きる人々の遠野物語100年間の受容と抵抗」（『東北学院大学教養学部論集』165所収）など。

⁹ 注連縄の民俗学的背景を想像すると一層面白くなるだろう、と記述した学生がかろうじて近いといえようか。

¹⁰ 「(withコロナ) 大学オンライン授業、維持 宮城県」（『朝日新聞』2020年6月19日付け記事）によると、「好きな時間に見られるオンデマンド型の授業だと、深夜に視聴する学生が一定数いることが分かった。昼夜が逆転するため生活リズムに乱れが起きると懸念する声もあった。」とある。本学学習支援システム（Moodle）によるログイン記録を概観しても、この傾向があることは理解できる。

¹¹ 黒沢浩『博物館教育論 = Museum Education』（講談社、2015）、P153より。傍点ママ。

¹² Twitterを活用した、「#curatorbattle」（博物館のコレクション紹介の一種）など。